The Japanese Orthopaedic Society for Sports Medicine

日本整形外科スポーツ医学会ニュースレター

No.5 2003年9月30日発行

■第29回日本整形外科スポーツ医学会学術集会を終えて■

会長　今給黎篤弘

標記学術集会を，7月17日(木)，18日(金)の両日，長野県軽井沢町で開催いたしました．シンポジウム，パネルディスカッション，主題，ディベート，一般演題をあわせて133題の演題と500名を超えるご参加をいただき，実り多き会との評価を頂戴できました．これもひとえに会員諸兄姉のご協力の賜物であり，この紙上をお借りして御礼申し上げる次第です．今回ご参加になれなかった先生方のためにも，会長の立場から見て印象深かった点をご紹介いたします．

1．基礎的研究にもとづいたスポーツ：「神経・筋の運動生理とトレーニング効果」として，教育研修講演(馬詰良樹教授)とシンポジウムの二本立てで，筋線維の動態や代謝機構の解明をベースに高齢化社会での健康増進システムの構築にまで言及いただきました．また，シンポジウム「中高年のヘルスケアとしてのスポーツの功罪」では，スポーツ医による正しい指導こそが"罪"の可能性を持つ高齢者のスポーツを"功"とする鍵であるとの示唆がありました．さらに，Martin Engelhardt先生，Iris Reuter先生のそれぞれ「Neuromuscular Alterations after Joint Injuries and Surgery」，「Does Neurogenesis Improve Physical Performance?」と題した特別講演は，スポーツ医学を支えるEBMに裏打ちされた基礎科学の重要性を再認識させられるものでした．

2．現場との連携・実地に役立つプログラム：地域におけるスポーツ診療や競技団体，大会のサポートなど現場でのニーズについて語り合いたいと考え，パネルディスカッションとして「地域におけるスポーツ診療―第一線での取り組み―」，「スポーツ外傷後の早期復帰を目指したリハビリテーションの工夫」を企画しました．前者ではボランティアとしての活動から抜け出し，われわれが競技団体の機構改革まで踏み込んでいけるシステム作りが必要ということを，後者では，いわゆるアスレティックリハビリテーションや運動生理学的アプローチ，またコ・メディカルとの連携の重要性を痛感いたしました．このほか教育研修講演「スポーツ医と保険診療」(中村純次先生)ではこれまで焦点とならなかった社会保険の問題を，「スポーツと栄養・食事・飲料」(杉浦克己先生)ではニュートリションの問題を，「学生スポーツにおける重度障害・損傷」(黒澤尚先生，桜庭景植先生)ではアメリカンフットボールやラグビーにおける重度損傷とその予防法についてわかりやすく解説いただきました．また，日常診療の中でよく遭遇する「アキレス腱断裂」は，ディベートの形で保存療法，手術療法それぞれの立場からの忌憚のないお話をいただき，双方の長所・短所を浮き彫りにすることができたと存じます．

3．さらにスポーツ：かつてロッテの剛速球投手として名を馳せた村田兆治氏による講演「全力投球完全燃焼」には，参加者一同一スポーツファンとして聞き入っておりました．また，ゴルフ，テニス，ジョッギングなどのスポーツアクティビティにも多数の会員がご参加され，大いに軽井沢を楽しんでいただき，軽井沢を会場に選んだ目的は成功したと自負しているところであります．

最後になりましたが，整形外科スポーツ医に与えられた課題は山積しておりますが，一方ではその進歩・発展には目を見張るものがあります．さらに上のレベルを目指すとともに，スポーツを愛好する市民生活の中に正しい知識・情報を提供していく必要性を改めて感じました．微力ながら今後ともスポーツ医学の向上に努力してまいる所存であります．先生方のご指導をさらにお願い申し上げます．会員の皆様のご指導とご協力に改めて御礼を申し上げ，報告記とさせていただきます．

第30回日本整形外科スポーツ医学会学術集会開催にあたり

会長　青　木　治　人

第30回日本整形外科スポーツ医学会を担当させていただきますことは，私どもの教室にとって大変光栄なことと感じています．第30回という節目の会ですのでぜひ成功させたいと考えています．期日は平成16年7月2日(金)，3日(土)の両日で，場所は東京の都市センターです．

スポーツが文化として認知されるにしたがい，それを支えるためのスポーツ医学に対する関心や需要はますます高まっています．しかしながら本学会の学術集会は必ずしもその活性を維持しているとは思えません．これは大変残念なことです．整形外科に入ってくる若いドクターの中には，スポーツ医学に強い関心をもっている人間が少なからずいることは事実です．しかし，実際に学術集会への参加者数は低迷しており，演題の数も決して多くはありません．

各部位の専門学会はもちろんのこと，各地域の総合的学会などでは必ずといっていいほどその主題の中にスポーツに関するものが含まれています．すなわち「スポーツ」というのは多くの学会の中で無視しえない中心的課題となっているのです．ニーズや関心はある．にも関わらず日本整形外科スポーツ医学会への参加者数や演題数は低迷し続けているのですから，ここらで何とかしなければ，と考えています．

今回私どもの教室でこの会を開催させていただくことになってから考えたことは，いかにして多くの先生方に参加していただけるような学会にすることができるか，いま一度考えてみようということでした．

まず学術集会の方向性をはっきり2つ出し，それに加えて，若い先生たちが参加しやすいテーマでいくつかの実技的講習会を組む，ということにしました．

まず，競技スポーツについてですが，競技復帰へ向けた治療技術を進歩させることはもちろん重要です．そのための技術，知識を向上させることを討論するのがこの学会ですから，しかし同時に，選手の障害予防や，結果としての競技力向上に実際のところ医学はどれだけ関わっているかを再検討すること，そしてそれはトップレベルだけではなく，若年者にも及んでいるのかどうかも検証することも重要です．競技団体の中で整形外科スポーツ医に対する必要性が認識されて初めて社会的にも認識されるのです．スポーツの怪我の治療の専門は整形外科である，とただいっているだけではことは始まりません．「スポーツを知ったうえで，あるいはスポーツ選手の実情を知ったうえで整形外科治療法を検討する」というのが他の学会と異なる本学会の特徴であると考えています．この点をもっと学術集会を通して世に知らしめるべきです．

第2番目は，スポーツを通じて運動器の機能向上，あるいは維持をいかにして図るか，を討議するのもこの学会の重要なテーマになりつつあるという点を再確認することです．いままでのように，スポーツ現場からの問題を解決するだけではなく，「運動器の機能維持のために」といった観点から適切なスポーツを行うことがいかに大切であるかを積極的に社会に広めることも必要だと考えるからです．

以上，今回の本学術集会を開催するに当たり大きく分けて2つの基本的考えを述べさせていただきました．競技団体内部における整形外科スポーツ医学に対する認識の向上，健康スポーツを普及させるための取り組み，の2点です．したがってシンポジウム，パネルディスカッション，教育講演などもその方向で組んだつもりです．また，それ以外にも先にも述べましたように，若い先生方が参加できるようなワークショップを考えています．

この時期は多くの学会が重なってしまいますが，ぜひ多くの先生のご参加をお待ちしています．

第30回日本整形外科スポーツ医学会学術集会

会　期：2004年(平成16年)7月2日(金)・3日(土)
会　場：東京都／都市センターホテル
詳細は，ホームページhttp://www.jossm.gr.jp/をご覧ください．

日本整形外科スポーツ医学会　2003年度新評議員一覧

（46名；敬称略，50音順）

1. 青木　喜満　整形外科北新病院　副理事長
2. 麻生　邦一　麻生整形外科クリニック　院長
3. 阿部　　均　北里研究所病院整形外科・スポーツクリニック　院長補佐・部長
4. 阿部　宗昭　大阪医科大学整形外科学教室　教授
5. 雨宮　雷太　医療法人雨宮病院整形外科　副院長
6. 井上　雅之　NTT東日本札幌病院整形外科　医長
7. 岩本　幸英　九州大学大学院医学研究院整形外科　教授
8. 内尾　祐司　島根医科大学整形外科学教室　教授
9. 太田　美徳　札幌市発達医療センター　発達支援担当課長
10. 大塚　隆信　名古屋市立大学医学部整形外科学教室　教授
11. 大野　和則　手稲渓仁会病院整形外科　部長
12. 大森　　豪　新潟大学医学部整形外科学教室　助教授
13. 岡田知佐子　高岡市民病院リハビリテーション科　部長
14. 金岡　恒治　筑波大学臨床医学系整形外科　講師
15. 北岡　克彦　金沢大学医学部整形外科学教室　講師
16. 久保　俊一　京都府立医科大学整形外科学教室　教授
17. 小林　保一　善衆会病院群馬スポーツ医学研究所　診療部長
18. 西良　浩一　徳島大学医学部整形外科学教室　講師
19. 清水　克時　岐阜大学医学部整形外科学教室　教授
20. 進藤　裕幸　長崎大学医学部整形外科学教室　教授
21. 杉本　勝正　名鉄病院整形外科　部長
22. 高杉紳一郎　九州大学医学部リハビリテーション部　講師
23. 竹内　良平　横浜市立大学医学部整形外科学教室　助教授
24. 竹田　秀明　帝京大学医学部整形外科学教室　助手
25. 立入　克敏　たちいり整形外科　院長
26. 谷　　俊一　高知医科大学整形外科学教室　教授
27. 帖佐　悦男　宮崎医科大学整形外科学教室　助教授
28. 月坂　和宗　マツダ病院整形外科　部長
29. 藤　　哲　弘前大学医学部整形外科学教室　教授
30. 永田　晃生　久留米大学医学部整形外科学教室　教授
31. 中山正一郎　済生会御所病院整形外科　部長
32. 原　　邦夫　社会保険京都病院整形外科　部長
33. 樋口　潤一　財団法人弘潤会　野崎東病院整形外科　部長
34. 藤井　康成　鹿屋体育大学保健管理センター　助教授
35. 古谷　正博　古谷整形外科　院長
36. 堀部　秀二　大阪労災病院整形外科　部長
37. 松本　秀男　慶應義塾大学医学部整形外科学教室　助教授
38. 三浦　裕正　九州大学医学部附属病院リハビリテーション部　助教授
39. 水田　博志　熊本大学大学院整形外科学教室　助教授
40. 三橋　成行　藤沢市民病院整形外科　部長
41. 宗田　　大　東京医科歯科大学大学院整形外科学教室　教授
42. 安井　夏生　徳島大学医学部感覚運動系　教授
43. 山下　敏彦　札幌医科大学整形外科学教室　教授
44. 山本　晴康　愛媛大学医学部整形外科学教室　教授
45. 柚木　　靖　川崎医療福祉大学医療技術学部　教授
46. 吉矢　晋一　神戸大学大学院医学研究科整形外科学教室　助教授

GOTS Traveling Fellowship 報告記

済生会奈良病院　杉　本　和　也

2003年度(第13回)のGOTS Traveling Fellowship派遣員に選出され，約1ヵ月間渡欧して貴重な体験をさせていただきました．日本から私と山形大学整形外科の高原政利講師の2名，韓国からChoi先生とMoon先生の2名，計4名がGOTSへ派遣されました．5月23日に日本を出発し，ドイツ，スイス，オーストリアを歴訪しました．

フランクフルトでGOTS学会長のMartin Engelhardt先生の出迎えを受けるところから1ヵ月間の日程が始まりました．ケルンのDreifaltigkeits-Krankenhaus(三位一体病院)ではDr. Schmidt-Weithoffに大腿骨側でinterference screwを用いないユニークなBTBによるACL再建術を披露していただきました．また，ドイツスポーツ大学を訪れ，Biomechanics研究棟を見学し，われわれも講演させていただきました．ハンブルグでは関節外科専門病院Park-Klinikを訪問，Dr.Bongaertsの手術助手を経験させていただきました．ベルリンではフンボルト大学整形外科を訪問し，Noack教授のもとで行なわれる多くの手術を見学しました．夜はベルリンフィルハーモニーのコンサートに招待されましたが，私達もドイツのドクター達も眠ってしまい，結局はすばらしいα波音楽であったと一同納得したのでした．

6月3日，スイスのバーゼルへ移動，Kantonsspital BaselでHintermann教授の手術(人工足関節形成術，足関節外側靭帯再建術，陳旧性アキレス腱損傷修復術，外反扁平足に対する腱形成術，リスフラン関節部分固定術など)を見学しました．Kantonsspital Bruderholzではアルペンスキーの女王コステリッツ選手の膝関節完全脱臼を完治させたDr. Friederichの手術を見学しました．バーゼル大学のTissue engineering研究室へも訪問させていただきました．マグリンゲンでは国代表クラス選手の体力評価やリハビリテーションを行なうSwiss Federal Sports Instituteを訪問しました．また，サッカーヨーロッパカップ，スイス対ロシアの真剣勝負を観戦する機会もありました．ここまではどの訪問地も猛暑で，クーラー設備のない宿舎では寝苦しい夜が続きましたが，ダボスに入りようやく高原で涼しい気候に恵まれました．ダボスではSpital Davosを訪問，近くにAO Instituteがあり，Spital DavosはAO法の実践病院といえる場所です．Dr.Rillmannから最新のAO法解説を受けました．

6月10日，オーストリアへ移動，インスブルックのSanatorium KettenbrückeでSperner教授の肩関節鏡視下手術を見学，ザルツブルグではUKH Salzburgを訪問，あのアルペンスキーの帝王で冬季五輪金メダリスト，マイヤーを交通外傷から復活させたDr.Obethalerにお世話になりました．チロル地方屈指のスキーリゾート，キッツビューエルでは1st International Shoulder Arthroscopic Symposium 2003に参加，ウィーンでは，DonauspitalでDr.Kristenの足の外科手術を見学しました．ウィーン大学では「高度な不安定性を有する陳旧性足関節外側靭帯損傷に対する骨付き膝蓋腱移植」について講演させていただき，Kotz教授からお褒めの言葉を頂戴いたしました．

6月17日，再びドイツに入り，ストラウビングでスポーツ選手のリハビリテーションを手掛けるEden Rehaを見学，Klinikum St.Elisabeth StraubingでDr.Eichhornの手術を見学することになりました．朝7時から夕方5時までの間に何と13の手術が行なわれ，うち6例はACL再建術でした．昨年はACL再建だけで750例以上行なったとのことでした．チムジーでは巨大なリハビリテーション専門病院Simssee Klinikを訪問しました．

6月20日，いよいよGOTS Congressが始まりました．初日には招待講演として高倉教授が「Diagnosis and treatments for sports injuries of the foot and ankles」について述べられ，絶賛の拍手を受けられました．

その夜の懇親会で，GOTSの重鎮かつ日本整形外科スポーツ医学会の名誉会員でもあるDr.Montagが相手をしてくださって，楽しい時を過ごしました．翌日，fellow 4名は各1題づつの演題発表を無事終え，最後の夜がやってきました．会長招宴では，最後のドイツ料理を味わいつつ，旅の間に出会ったGOTS関係者が皆さん本当に親切であったことにあらためて感謝したのでした．

本当に楽しく勉強できた1ヵ月でありました．この機会を与えてくださいました本学会関係者，推薦を頂戴した高倉義典教授，済生会奈良病院の皆様に心より御礼申し上げます．

左から山形大学 高原先生，Iris Reuter先生，GOTS学会長のMartin Engelhardt先生，筆者

GOTS Traveling Fellowship 報告記

山形大学整形外科学教室　高　原　政　利

5月23日，フランクフルト空港にて，杉本和也先生(済生会奈良病院)と私の日本チームが合流し，その1～2時間後にホテルで韓国チームのChang-Hyuk Choi先生(Catholic University of Daegu)とYoung-Lae Moon先生(Chosun University)と対面し，日韓(韓日)カルテットが結成されました．ケルン，ハンブルグ，ベルリン(以上ドイツ)，バーセル，ダボス(以上スイス)，インスブルック，ウィーン(以上オーストリア)，ストラービング(ドイツ)そしてGOTSの学会が開かれるミュンヘン(ドイツ)を訪問して，6月23日に無事に帰国しました．このGOTS Traveling Fellowshipは大変楽しく愉快なすばらしい旅でした．なぜ，そんなにすばらしかったのかを要約しますと，

1. 完全接待型旅行/ドイツ人は親切でおおらか
2. 毎日dinner/ほとんど美人女性付き—しかも優しい
3. ドイツ人は車好き/最高時速280 km(ポルシェ)
4. 手術/旅行/自由—手術早い，天気最高，ゆったり気分
5. 発表4回/少しは私にも何かさせて
6. 4人の遊び人/個性派集団
7. 毎日が刺激的/豊かな芸術の町

まず，完全接待型の旅であることに驚きを覚えました．私自身が準備したものは，行きと帰りの飛行機だけです．他はすべてGOTSの諸先生方が準備してくださいました．空港にはGOTSの会長のEngelhardt先生が来てくださり，旅行(ローテンブルグ，ビルツブルグ，フランクフルト)，食事，ホテルすべてを提供してくださいました．他の訪問地でもいろいろな工夫を凝らした歓迎を受けました．ドイツ人(ドイツ，スイス，オーストリアの人々)は親切で，おおらかで，しかもタフで優れた民族だと感じました．

毎日，レストランや教授宅などでdinnerがありましたが，天気が最高だったので，屋外で食事をする機会に恵まれました．メニューを見てもサッパリわかりません．この時に私たちがよく用いたフレーズを紹介します．"What is your recommendation?""I always follow your recommendations.""I want to enjoy local beer and local foods.""This beer is very good."ドイツのビールは半透明でとてもクリーミーで実に美味しかったのでした．旅も後半になりますと，"I am surprised because taste of local beer is very good everywhere. Actually, I can not figure out the differences."Dinnerの際には，大変お若くて美人のご夫人が同伴されることが多く，私たちをほっと一息なごませてくれました．また，女性研修医，秘書さん，ツアーコンダクター，看護婦さんなどの美女たちが同伴することが多く，私たち4人の間では密かに席の取り合いなどの水面下の競いが絶えませんでした．男女がほほを寄せあって写真をとるのがドイツ流と知り(ほんとかな？)，デジカメ持って"Can I take your picture"と近付き"with me？"と付け加え，誰かにツーショット写真を撮ってもらうのが常となりました．優しく笑って私たちを受け入れてくれるドイツ女性はマリア様のように慈悲深く懐が深いと感動しました．旅も後半になると，やや年配のご夫人にさえ，何か胸に迫る魅力を感じてしまうようになっておりました．

紙面の関係で，7つのうち2つしか報告できませんでした．10数年にわたるGOTS Traveling Fellowの交流によって，ドイツ—スイス—オーストリア—韓国—日本の諸先生方の間に信頼と友好の関係が築かれていることをひしひしと感じました．私たちにこのすばらしい体験を与えてくださいました皆様に厚く感謝の気持ちを表したいと思います．ありがとうございました．

貸し切りボートでのdinner付きベルリンの河下り：左からChang-Hyuk Choi先生，2人おいてYoung-Lae Moon先生，杉本和也先生，私の前に突然現れた美人看護婦，左奥と右奥には医師，看護婦，秘書ら

各種委員会報告

編集委員会

担当理事　原田征行
委員長　戸松泰介

2002年度の日本整形外科スポーツ医学会雑誌編集委員会(担当理事：原田征行)は青木治人，馬場久敏，浜田良機，金谷文則，柏口新二，木村雅史，仁賀定雄，下條仁士，松末吉隆，竹田毅，土屋明弘，戸松泰介の12名で構成され査読などにあたっております．

日本整形外科スポーツ医学会雑誌は毎年2冊の和文誌，1冊の英文誌，1冊の学会抄録誌計4冊からなっていますが，22巻は和文誌2冊，論文25編，英文誌1冊，7編と抄録号で終了，23巻は和文25編，英文2編で査読を進めておりますが，なお数編掲載用論文を確保する必要がある状態です．

近年投稿原稿数が少なくなる傾向が強く，とくに英文論文が少なくなっています．対策として地方のスポーツ関連研究会に投稿を呼びかける，特集号の企画，また英文号を海外の図書館，施設に送るなどの案が検討されていますが，質の高い雑誌にすることが第一と思います．

学術検討委員会

担当理事　守屋秀繁
委員長　冨士川恭輔

理事長より指示のあった学術集会のあり方について検討するために，評議員に下記のアンケートを行ない，①学術集会のあり方についての意見，②学術集会で取り上げるべきシンポジウム，パネルディスカッションのテーマ，および演者についての意見，③学術集会で取り上げるべき教育研修講演のテーマおよび講演についての意見，④その他，の結果に基づき，当面の学術集会のあり方についての委員会の意見をまとめて次期会長に伝えた(委員会には，理事長，今給黎会長のご出席をいただいた)．

しかし「学術集会のあり方」は極めて重要な問題であるので，今後も委員会として継続的に検討する．

医学生のスポーツ外傷・障害の調査について，桜庭委員に継続して依頼することにした．

日本スポーツ治療財団提供の研究助成の応募者の選考を行なった．

広報委員会

担当理事　中嶋寛之
委員長　田中寿一

広報委員会は①ニュースレターの発行，②インターネットホームページの作成・管理，③患者さん・関係者説明用パンフレットの監修を主な事業として活動しております．とくに，2002年度は，ニュースレターをこれまでの年1回から年2回の発行とし，「ソルトレークオリンピック」と日本で開催された「FIFAワールドカップ」に関する記事を掲載しましたところ，各方面から大きな反響をいただきました．

また，ホームページをリニューアルし，見やすいものとしましたが，まだまだ内容的には充実しているとはいえません．アンケートの内容を参考に，さらに充実させていく予定です．

患者さん・関係者説明用パンフレットについては，「オスグッド病」，「足首の捻挫(足関節捻挫)」，スポーツ外傷の応急処置(RICE処置)」，「腰椎分離症」の4つが完成しています．さらに疾患の種類を増やしていく予定ですが，皆様のご意見を是非とも広報委員会宛お寄せください．

国際委員会

担当理事　生田義和
田島直也
委員長　福林　徹

国際委員会としてはGOTSとの協力関係を発展させるべく本年も杉本和也(済生会奈良病院)，高原政利(山形大学)両先生を本学会派遣のFellowとして選出し，2003年5月23日～6月22日の間，ドイツ，オーストリア，スイス3国を訪問，GOTS meetingで発表をしていただくとともに，本年の学術集会にGOTSの会長であるMartin Engelhardt先生を招請した．

また，2003年3月Auckland(New Zealand)で行なわれたISAKOSに多数の日本からの先生が参加されるよう，積極的な会員登録を行なった．ISAKOSはスポーツ整形外科関連の国際学会としては最大級のものであり，2005年にはHollywood (Florida, USA)で行なわれる予定である．本委員会としては今後も日本人会員の増大を計り国際学会での日本の先生方の認知度を高めたい．

国際委員会としては隣国との友好を深めスポーツ整形外科の知識を交換し合うことはきわめて有用なことと考えている．近年，その交流が下火になり発表される先生が減少している日韓整形外科スポーツ医学会をこの機会に盛り上げ2004年韓国で行なわれる予定の本会に多数の先生方が参加されるよう努力したい．

教育研修委員会

担当理事　武藤芳照
委員長　岡崎壮之

2001(平成13)年度に新たに生まれた教育研修委員会は，長年スポーツ現場と地道に深い関わりをもち続けてきた8名(内，女性1名)より組織され，学会による社会への「教育」活動に重点をおくことを基本方針として決めた．

その具体的活動として，「大学生・高校生のためのスポーツ医学セミナー」を正式な学会の事業として企画し，理事会・評議員会での事業計画と予算の承認後，2002(平成14)年7月27日に，安田和則評議員(北大スポーツ診療科教授)の協力の下，北大で279人の参加者を得て行なわれた．

東京，福岡，名古屋などからも参加し，定員300名のところ，450名もの申し込みがあり，嬉しい悲鳴をあげる程の反応であった．

会場にセーラー服姿の女子高生も座り，いつもは謹厳実直な井形高明理事長も誠に柔和な表情で開会の挨拶をされていた．参加者の熱心な聴講ぶりと質疑の中から，正しいスポーツ医学の知識の普及・啓発の必要性を強く再認識した．と同時に，こうした若者たちへの教育事業は，社会への教育という意義に留まらず，整形外科スポーツ医学の人材養成，学会の活性化と組織化，学会関係者の交流の拡大にも結びつく重要で深い意義を有することを実感した．

2003(平成15)年度は，九大の岩本幸英教授のご支援により，8月23日(土)に九大でこのセミナーが開かれる．「若い人への教育のためなら」と，各地のスポーツ医がボランティア的な活動と承知して参集し，協力していただけることを嬉しく思っている．

こうした活動が積み重なることにより，本学会，そして整形外科スポーツ医学がゆっくりだが確実な形で充実・発展することを教育研修委員会委員一同願っている．

社会保険委員会

担当理事　圓尾宗司
委員長　龍　順之助

社会保険委員会は，整形外科領域のスポーツ医療活動における新たな社会保険点数の設定，また保険点数の改正を行なうべく発足しました．その目標のために外保連への加盟が必要となり，田島實委員にオブザーバーとして1年間外保連委員会に出席していただき，加盟申請を行なってきました．おかげを持ちまして，2003年(平成15年)1月27日に，外保連総会にて加盟が正式に認められました．これを機会に，外保連担当の委員として活動的な新たな委員を3名追加しました．田島實先生(実務)の他，竹田毅先生(検査)，土屋正光先生(処置)，斎藤明義先生(手術)です．各先生にはお忙しい中，各担当の委員会に出席していただいております．本年は，新設及び改正に関する要望書を，6月末日までに提出することが必要でしたが，新規加盟であるため，今回は要望書の提出は行なわず，外保連試案へ検査2項目，手術1項目を登録申請することにしました．

また，全会員を対象にスポーツ診療と関連する保険のための問題点につきアンケートを行ないました．返答のあったアンケートに関連して，外保連の顧問で社会保険に関して造詣の深い，中村純次先生(東京厚生年金病院形成外科顧問)にお願いし，「スポーツ医と保険診療」と題した講演を第29回本学術集会にて開催することになっております．

今後も外保連加盟の日整会関連の9つの学会のうちの1つとして日整会と連絡を取りながら，スポーツ整形外科の保険医療の新設，改正を行なってゆく予定です．よろしくご指導ご鞭撻の程，お願い申し上げます．

事務局からのお知らせとお願い

事務局では現在，会員名簿の発行準備をすすめております．ご住所，勤務先のご変更等ございましたら，お早目にお知らせくださいますようお願い申し上げます．

ISAKOS 入会のご案内

神戸大学整形外科学教室　黒　坂　昌　弘

ISAKOS(International Society of Arthroscopy, Knee Surgery and Orthopaedic Sports Medicine)は，International Arthroscopy Association と International Society of the Knee の2つの国際学会が併合して1995年に発足した国際学会です．その名前のごとく，関節鏡手術，膝関節手術，整形外科スポーツ医学を専門とする医師の集まりですが，実質的に国際学会として世界中の整形外科医が参加する，非常にレベルの高い学会になっています．International Arthroscopy Association の創始者は，関節鏡を世界に先駆けて開発された渡辺正毅先生であり，世界的レベルで活躍しておられる多くの整形外科医がおられることから，日本も積極的にこの会に参画してきました．ISAKOS発足以来，冨士川恭介先生や，史野根生先生などがBoard of Directorsのメンバーとして，会の運営に参加され，現在は，守屋秀繁先生と越智光夫先生が日本のみならず，アジアを代表されてBoard of Directorsのメンバーとして，会の運営に参加されています．ISAKOSのメンバーになると，雑誌Arthroscopy(北米関節鏡学会誌にもなっている緑色の表紙の雑誌です)が無料で送付されてくるほか，世界中で開催される学会やセミナーの情報を含め，いろいろな情報が伝えられます．2003年はニュージーランドのオークランドで開催されましたが，次回の2005年はアメリカのフロリダで，そして2007年はトルコのイスタンブールで会が開催されることが決まっています．今年の会には，テロなどが続く不穏な情勢の中でも1500名以上の参加者があり，この学会がいかに世界的な規模になっているかを裏づけられていることを象徴していました．日本は現在アメリカに次ぐ第2の会員数を有していますが，日本整形外科スポーツ医学会の会員個々のレベルアップのため，また日本の国際的な立場を高めるためにも，是非会員に応募していただけるようお願い申し上げます．会員の応募用紙はwww.isakos.comからダウンロードできます．応募用紙は日本語で記入できるようになっています．Active memberとして登録するには会員の推薦状が必要になりますが，日本整形外科スポーツ医学会や日本膝関節学会・関節鏡学会の事務局に申し込みの意思を伝えていただくと，学会員は推薦していただけるシステムになっていますので，多くの先生方に会員応募していただけるようお願い申し上げます．

編集後記

軽井沢で開催された第29回学術集会は「スポーツ医学の基礎」から「現場との連携」まで幅広く取り上げていただき大変に活発な議論がなされました．

一方では，久しぶりに豊富なスポーツアクティビティーで参加した会員は大いに盛り上がりました．今給黎教授および東京医科大学の関係者の方々ご苦労様でした．

今回は46名という沢山の評議員が選出されましたが，各県が等しく日整会スポーツ医学会の研究，実践の成果を享受すべく，各県複数の評議員を置くことは井形理事長の悲願でもあります．まだ評議員が1人の県もありますので該当する県の方は体制整備にご協力ください．

尚原，杉本両先生よりGOTS Traveling Fellow報告をいただきました．欧米の先生方の余裕ある生活態度も大いに刺激となり参考になった様子．今後の研究，診療のなかに取り入れてください．　(須川　勲)

日本整形外科スポーツ医学会ニュースレター　No. 5　　2003年9月30日発行

編　集：日本整形外科スポーツ医学会広報委員会
中嶋 寛之(担当理事)，田中 寿一(委員長)，入江 一志，酒井 宏哉，須川　勲，菅原　誠，三木 英之

発　行：日本整形外科スポーツ医学会
〒468-0063　名古屋市天白区音聞山1013　有限会社 ヒズ・ブレイン内
TEL 052-836-3511 / FAX 052-836-3510
E-mail info@jossm.gr.jp　URL http://jossm.gr.jp